

# 生命性にこたえる

津守 真

子どもは、そのときを生命的に生きている。それに対して大人もまた生命性をもって答えられるときに、大人と子どもとの間の生きたダイナミクスがはたらくのだと思う。

## 歩き回る子どもにみられる生命性

三歳のR子は、一階から階段が上がって二階へ、ベランダから外階段をおりて庭へと、薄暗い廊下や広い通路を通り、いくつもの部屋に立ち寄って、学校の中の空間をめぐって歩く。もとの保育室にもどると、また階段へと何度も循環する。都市の真中に住んで、自分の思うところに自分で歩いてゆくことが許されないこの子どもにとって、自分の足で歩くこと、また、いろいろの空間や通路を、次から次へと開拓してゆくことに、生きているよろこびを感じるのだろうか。R子と一緒に、何回も同じ所を歩きながら、私には同じこと

のくり返しなのだが、この子にはそのことがうれしいのだろう。そう思うと一緒に歩くことと自体がたのしくなる。R子はときどき私を見上げて笑う。

歩くことは、新たな空間を眼前に展開させる。自分が歩くことによって次の空間がひろがることは、未来が開ける感覚をつくり出す。自由に歩き回ることが許されない都会の環境の中で、この子どもには未来も閉ざされたように感じられたであろう。この子はたえず機嫌がわるく泣きわめいていたのだが、それは十分に発動できなかった生命性の歪曲だったのだと思う。

五月末の天気の良い一日、登園して直に庭でしゃがんだR子と出会った私は、一緒に地面に腰を下ろして砂をさわっていた。何をしなければと思うのではなく、いまこの時を静まって一緒に過ごすことを快く感じていた。快く吹く風と太陽と土と、自然の物質に恵まれたとき、大人と子どもとの間に快さが通い合う。他の子どものことが気かりなのだが、その煩いのためにこの静かな時をこわしたら、すべてがだめになってしまう。

実際、このあと、何人かの子どもたちと、久しぶりに庭にたらいをいくつも出して、一緒に水遊びをすることができた。あのひとときの静けさがなかったら、一緒に集まったその場は、もっと葛藤を生む場になったのではないかと思う。

それから一週間後、R子はピアノの音と共に、ホールの空間をぐるぐる歩き回り、バレーの踊り子のように回転し、四〇分程も踊り回って過ごした。ことばを話さないこの子ども

もが、大声を出し、笑った。こういう子どもの生命的躍動に誘われて、まわりの子どもも大人も、それぞれに手足を動かして踊った。子どもの生命性にこたえるのには多大のエネルギーを要するが、それがなかったら子どもの生命性も十分に発揮できないだろう。若い実習生が加わると、動きは一段と活発になる。老年の私には少しその場から身を引きたい気持ちも生ずるが、子どもが私を見て動いているので、その生命性にひき立てられてこの日は動いてしまった。

#### 同じ場所に留まる子どもにみられる生命性

遠くへ遠くへと空間をひろげることによって、生きている証を感じる人もいるが、また逆に、同じ場所に留まる中で生命感を充実させる人もいる。子どもにも両方の傾向があるように思う。

発作が多くて休みがちだったY男が母親と門から入ってきて、すぐに二人乗りのブランコに座った。私も向かい側に座るとゆっくりと揺れるブランコに長い間座っていた。Y男はときどきおりてまわりをふらふらと歩くが、じきにブランコにもどる。二時間程もブランコで過ごした。長い時間と感じられないでもないが、Y男にとって快さそうな動きに合わせてブランコを揺らしていると、その小さな揺れる空間が、Y男の呼吸と一緒に膨らんだり縮まったりする微妙な動きの空間に感じられる。発作の多い子どもには、何よりも身体的に快く過ごすがたいせつだが、Y男にとって、呼吸に合わせて調節されるこの空

間に留まることが生命性を生み出すものになっている。こういう子どもは、保育者が傍からはなれるわけにはいかないもので、長時間、長期間にわたると、どうやってその時間をもちこたえるかが問題になる。だが、同じ場所に留まることの中に、呼吸のリズム、身体の動き、それに伴う心の微妙な揺れ動きがあることに気付くと、そこは単調な時間ではなくなる。また、大人自身の呼吸や身体の動きをも自覚してみると、そこは大きな宇宙につながる空間である。

帰りかけた母親にこんなことを話すと、家でもお気に入りのソファの上で身体を動かしながら長時間過ごすことが多いという。その次の日に来たときに、母親が話すには、前日帰りがけにこのことを考えたが、歩いているときも似たようなことがあるという。母親はこの子の呼吸に合わせて立ち止まったり、歩みの速度を調節しており、それがひとつく違うと、一緒に歩くのがとても大変になる。「気が付くということがだいじですね」と、十年近くもこの子の傍を離れたことがない母親が語った。

この子どものことに限らず、保育者の生活は、子どもと共に留まる生活である。物理的には限られた空間の中のことである。子どもの生命性とその表現に気付き、大人もまた生命性をもって応答するようになるとき、留まる生活の中に、力動的に動く多彩な内容が生まれてくる。

生命的な子どもに対して、大人もまた生命的に応答することは、老若を問わず、保育に

欠くことはできない。それはかならずしも大声を出したり元気に動くというのではない。大人の側から言うならば、子どもに応答することに意味を見出せるように、自分自身の身の条件をととのえることが重要となろう。その工夫は保育者の年令やおかれた状況によって異なるであろうが、いずれにせよ、保育において生命的に応答することには、人間に対する洞察、すなわち知性の修練を必要とするのだと思う。

(愛育養護学校)

